

2015年度 世界展開力強化事業
中南米との大学間交流プログラム（短期留学）帰国報告書

国際食料情報学部・国際農業開発学科・一年 武田 翔吾

2016年2月10日から2月25日にかけて、世界展開力強化事業によってブラジルへ短期留学することができた。今回応募した目的は、自分の所属する研究室の研究対象である、熱帯における農業の食糧生産を見てみたいというのが第一にあり、そのうえで大きな目標が3つあった。1つ目は、フェアトレードに関してのものだ。僕は途上国の農業による発展に興味があるが、そのためにはフェアトレードは欠かすことのできない概念だと思っていた。ブラジルで、僕はいつも消費者の側で考えているフェアトレードに関して生産者の側から考え、フェアトレードに大事なものを見つけないかと思った。2つ目は、遺伝資源の発展の方向性を探ることだ。ブラジルには多くの貴重な遺伝資源があり、薬学などではその応用が期待されている。しかしその利用をめぐる途上国と先進国の間で利権争いがしばしば起こっている。僕はその問題の実態を知り、この問題が進むべき方向性を見つけたかった。3つ目は、農業を営み発展していく上での持続可能性だ。ひととき強大で豊かな自然を抱え、大きく成長しようとしているブラジルで僕はこのことについて考えたかった。

実際に今回の留学では、サンパウロ州ピラシカバ市のサンパウロ大学や市内の農業関連施設、サンパウロ市の日系農家さんや農大会館、パラ州ベレンのアマゾニア農業大学、トメアスーのアグロフォレストリーの農家さんやジュース工場など、ほかにも多くの場所を訪れた。ここでは、サンパウロ大学とトメアスーで学んだことについて報告し、自分の目標達成度について記述する。僕は前述の目標を達成するため、訪れた様々な場所において積極的に現地の人々と交流したり、質問したりしてみた。時には未熟な英語でも恐れずに使い、コミュニケーションを図った。またたくさんメモをとり、常に知識を吸収しようとする姿勢で学習しようと努めた。

サンパウロ大学では、施設見学や学生との交流、語学研修などをした。僕は同じ大学生として刺激を受けることがとても多かった。大きなキャンパス内の大規模な実験施設や広い圃場で、先生や学生は熱心に、そして丁寧に僕たちに向かって説明をしてくれた。その中で、僕はブラジルの農業や学生たちのことがだんだんわかってきた。まず強烈に感じたことは、その規模の大きさだ。地平線まで続くほどの巨大な耕地と、またその中で農業を営むための巨大なトラクターなどの設備、また灌漑設備や加工施設に至るまで、とにかく農業にかかわるものはすべて巨大だった。また、水分や栄養分を保持し土壌を守るための不耕起栽培、グリーンマルチなどの工夫を見ることができ、環境が違えば農法は違い、その土地に根付き、適応した農法がどの地域にも存在するのだな、と思った。そして、僕が出会い話したサンパウロ大学の学生達は皆堂々としていて、農業の知識と意欲にあふれて

いるように感じた。交流会において、僕たちが答えに詰まるような質問にすらすらと答えていく学生たち、ブラジル中を旅して、実際に農場に入り農業をして、経験しながら学んでいく活動をしているサークルの学生たち、また圃場において、僕が教授だと勘違いするほど知識が豊富で、自信をもって、あらゆる質問に答えてくれた学生。彼らを見ていると自分はまだまだ意識も知識も不足していると感じ、もっと努力しようと思った。そう言った意味で、レベルの高い学生たちに会い、交流できたことはとても価値のあることだと感じた。

そして自分の目標に関してサンパウロ大学で学んだことは、フェアトレードと持続可能性についてである。コーヒーを栽培している圃場を見学した際、実際にこれらがフェアトレードなのかどうか質問してみた。答はブランド化などの商業戦略に課題は残るものの、全体としてみればフェアトレードである、というものだった。僕はそのとき、なぜブラジルはフェアトレードをすることができたのか、必須の条件とは何か、ということについて疑問を持ち、もっとこの問題について知りたいと思った。また持続可能性に関してブラジルで感じたことは、農業が大規模であればそれなりの問題がある、ということだった。僕の質問に答えてくれた教授は、人口増加に対応するため雨の少ない冬にも農業を行わなければならない、土地の休閑期間が失われていることや、ブラジルでは多くの持続可能性についての議論が出ているが、実際に考慮して実行されているかどうかは疑問であることなどを話してくれた。実際に土地を大きく活用して作付けをするため肥料は大きく化学肥料に依存しているし、広すぎて管理が難しい圃場の病害虫対策は農薬や GMO が主たるものだ。また年中を通して気温が高いこともあり大規模な二期作が行われており、収穫用のトラクターの数十メートル後ろを次の作物の植え付け用トラクターが走る姿に僕は奇妙さと違和感を覚えた。こういった農法は欧米の機械、科学技術の影響を受けた資本集約的農業だと思った。ブラジルの広大な土地においてこれほど大規模に行えば、高い収益を得ることができる力強い農法だと思うが、このような農法では持続可能性はなおざりにされてしまうのではないかと感じた。

留学生活の後半に、パラ州トメアスーに数日間滞在した。今までの歴史においてトメアスーには、多くの日本人が移住してきた。僕は実際にトメアスーへいき、日系人の方々とふれあうことができた。また、焼き畑のように森を焼き払って農業をするのではなく、自然と共生し、森を育みながら農業をする、アグロフォレストリーという農法を見学することができた。特にトメアスーでは、トウモロコシやコショウ、カカオやアサイーなどを一つの耕地に順次植え付けていき、初めはトウモロコシやコショウ、次はカカオやアサイー、最後にマホガニなどの材料用高木が順番に収穫や伐採をする適期になっていき長年にわたりずっと収入を得ることができるという、遷移型アグロフォレストリーが日本人の手で生み出された土地である。僕は単作で一つの作物に頼らないこの農法は価格の変化に対応する柔軟性を持っていると思ったし、また農業を営む過程で森ができていくというのは、持続可能性の観点から見ても素晴らしい農法だと思った。また、トメアスーには農協

と文協という組織があった。どちらも日系人の力で成り立った組織であった。農協は日本と同じく生産物の卸売りや加工などを行う組織であるが、規模が非常に大きかった。僕がそのことを肌で感じたのは、ジュース工場の見学へ行った時だった。たくさんの農家から運ばれる果物を積み下ろし、レールに乗せ、殻を割り、搾り取る。また搾り取ったジュースは袋に詰めて温度を氷点下に保つ巨大な倉庫に運ばれる。品質管理も怠っていない。まるで大企業の加工施設のようで、僕にはこのジュース工場を農協が所有、運営しているということがにわかには信じがたかった。ブラジルは広大で、その土地を利用した優位性はもちろんあるものの、生産物を市場に届けるということに関しては移動距離が長く、また気温も高いためとても困難である。そこで、生産地で加工し、冷涼な条件のもと運搬するというのは素晴らしい知恵だと思ったし、またこの方法では誰か一人が大成功するわけではないので貧富の差が生まれにくいことも、組織の持つ重要な特性だと思った。そしてこのような安定した組織があるからこそ生産者は供給過剰を心配せず、安心して生産することができるのだと感じた。

農協をはじめトメアスーの農家が取引する先は日本では名の知れた大企業ばかりだった。僕には卸売り価格の相場がわからず、またフェアトレードには価格に関する厳格な定義はないため、フェアトレードということをはっきりと断言はできないが、人々は販路と取引の可能性が広がったことやその価格に満足した様子だったので、良い関係で取引をしているという印象だった。また、僕は今回の農協とジュース工場の見学で、フェアトレードに大事なものは、生産者にまとまりがあるということと、生産者が自由に販路を決定し、取引先を定めることができることだと思った。まとまりがあれば生産基盤は安定し、貧富の差も生まれにくい。また生産者の手で取引先を選べば、より条件の良い取引になりやすいし、価値に見合わない取引が続きにくい。そしてその為には、重要なことが2つあると思った。1つ目は、生産物や土地など、生産に関わるものの利権が生産者達のものであるということだ。それら利権が他人のものであったなら生産物の価値全体を享受することはできず、したがってその価値に見合った取引をすることができない。2つ目は、国際的な視野で取引を展開する力がある、ということだ。自分たちの取引する国際市場の情勢を知り、販路の決定や生産の調整、管理などを行うことが必要であると思った。

一方トメアスー文化農業振興協会、文協では、日本人の功績を広める活動や学校、道路の舗装の充実などを行政に訴える活動、またパトロールをして治安を守る活動なども行っていた。僕が強く感じたことは、トメアスーという社会全体の幸福を考えて活動しているということだ。文協がなければトメアスーはまとまりや秩序にかける社会になっていたかもしれない。僕はトメアスーのアグロフォレストリーやこれらの二つの組織を見学して、日本人の残した功績の大きさ、先人の偉大さを身にしみて感じ、それをとても誇らしく思った。

僕はブラジルの農業を見て、ブラジルの土地、作物、労働力に他国の文化や価値観、技術が合わさった場合の変化と進歩に驚いた。サンパウロでは欧米式の資本集約型農業とブ

ブラジルの広大な大地、豊富な労働力が合わさった場合の規模の大きさと生産力の高さを肌で感じ、またそのサンパウロでは疑問を感じていた持続可能性が、同じブラジルでも日系人が深くかかわったトメアスーでは強く感じられた。特にトメアスーは実際に日本人が移住して共に発展した土地なので、文化の融合をより強く感じた。ブラジルの豊かで強靱な森林と多様で貴重な感じ植物、年中栽培可能な気候などの特性に、日本の勤勉さや、自然を支配するのではなく共生しようとする自然観、組織を作り、個よりも全体を尊重する価値観などが交わった場合の躍進は素晴らしいものだったと思った。グローバル化が進行するにつれ様々な文化がまじりあうことが考えられるが、ブラジルで多くの文化の融合と発展を見て、多様性あふれるこの世界においては限りない新たな発展の可能性があるとと思った。持続可能性という、今まであまり考慮されなかった価値観を取り入れるなら、それを尊重してきた文化から学び、ともに発展していくことが重要なのではないかと思った。遺伝資源の問題に関しては、最近先進国がブラジルの植物にとっても興味を示しているが、現地では現代的な薬の流通により薬草などはあまり重宝されなくなり、昔からの知識や知恵が失われつつある、という話をベレンで聞いた。そのような状況では、お互いに不利益だ。遺伝資源の問題に関しても、資源を保有する途上国と技術を保有する先進国が、お互いの特性や知識を尊重しあい学びあい、利権を分け合って、全体で発展することが必要だと思う。遺伝資源の価値と可能性、植物の名前や特性、生えている場所や使用方法など、お互いが教えあって発展する可能性がある知識があるはずだ。また、そのためには遠く離れた情報交換だけでなく、人の移動が不可欠だと考える。実際に現地の自然や技術、文化、風土に触れ、人と人とが触れ合い、学びあうことが大切だし、そうでなくては見えないものがあり、二つの文化がともに発展していくことは難しい、と今回実際に訪れてみて感じた。

今回の留学では実際に外国を訪れて、多くの場所へいき、様々な人々に出会い、交流した。全体を通して僕はブラジルの人々との交流が一番印象深く、またその過程で多くの知識や知見に触れることができたと思う。今回の留学では自分の学びたいと思っていたものについてたくさん学ぶことができたし、また期待していた以上に多くのことを学習することができたと思う。そして、自分の掲げた目標のそれぞれについて実際に見学したり、知識を得たり、また過去に得た知識と絡めて考えることができた。しかし、その過程で自分の知識不足、英語の能力の不足を強く感じた。目標に対して自分なりに向き合い追及する積極性は満足のいくものだったが、それをさらに活かせる知識と能力を身に付けたいと思った。またその為に日々努力する必要があると強く感じた。

これからの学習は、今回の留学を踏まえて多くの知識と能力を得るために努力するとともに、自分の専門分野を開拓し、磨きをかけたいと思った。元々熱帯の農業を研究する研究室に所属してはいるが、まだ専門性には程遠い。今回ブラジルの熱帯条件下での農業を見て、PHなどの熱帯の悪条件を克服する分野の研究を専門的に学びたいと思った。また、今回多くの文化の融合と発展を目の当たりにして、さらに多くの文化や文化同士の交

わりを知りたいと思ったし、実際に行ってみてみたいと思った。また、多くの文化や価値観を踏まえて、多角的に物事をみて判断し、多様性を楽しむことができる人間になりたいと思った。

